

# 韋應物の雜擬詩について

——模倣の様式とその意味——

鈴木敏雄

## 一 「雜擬」について

唐の詩人・韋應物の現存の作品集『韋江州集』卷一に、「古賦」に續いて「雜擬」の部が立てられ、

「擬古詩」十二首 「雜體」五首 「與友生野飲效陶體」一首 「效何水部」二首 「效陶彭澤」一首

の計二十一首の擬作詩が收められている。「雜擬」の部が獨立して立てられたということは、擬作詩が他の様式スタイルの詩と區別され、何らかの評價を得たからであろう。本稿ではこの韋應物の擬作詩のスタイルとそれがもつ意味を、擬作詩史を踏まえながら考察することにより、擬作詩がいかなる點で評價されるのかを考えたい。擬作詩に對する章の取り組みと擬作詩史での位置も、同時に明らかにしよう。

『韋江州集』の部立ての「雜擬」という呼稱は、梁の昭明太子蕭統の『文選』に據ったものと考えられる。『文選』の「雜擬」の部も、晉代から南朝にかけて盛んに行われた擬作詩を、他のスタイルの詩と區別し、何らかの評價を加える意味で立てられたものだろう。

陸士衡「擬古詩」十二首 張孟陽「擬四愁詩」一首 陶淵明「擬古詩」一首 …… 鮑明遠「學劉公幹體」一首 「代君子有所思」一首

韋應物の雜擬詩について

范彦龍「倣古詩」一首 江文通「雜體詩」三十首

など、著名な詩人の取り組みを收めていることがそれをものがたるが、その呼稱を韋應物の場合も踏襲した。それは、數種の擬作詩を收録する點で形態が似ていることにも據るが、清の『文選』學者汪師韓が、擬作詩に言及した論の中で、「有唐一代、惟韋蘇州擬古八首、古意獨存。」（有唐一代、惟だ韋蘇州の擬古八首のみ、古意獨り存す。『詩學纂聞』）と指摘するように、韋應物の擬作詩が「古意」すなわち六朝の（前掲の陸機「擬古詩」十二首の）擬作様式を崩さずに温存し、六朝の流れを汲んでいると見えることにも據ろう。

ところでこの「雜擬」という呼稱であるが、韋應物の場合も含め、これだけでは擬作詩のいかなる價値が認められているのかが判然としない。そこでまず、この「雜擬」という呼稱について、その含義を明らかにしておく必要があるだろう。實はこの呼稱は、擬作詩の様式の特徴を明らかにする上で極めて示唆に富んでいる。

『文選』の注釋者の一人、韋應物と同じ唐人で、章よりやや先輩の劉良は、前掲の陸機の「擬古詩」十二首の題の下に、

雜、謂非一類。擬、比也。比古志、以明今情。（雜は、一類に非ざるを謂ふ。擬は、比なり。古志に比して、以つて今情を明らかにす。）

と注する。この注は陸機の擬作詩についてのみ言うのでなく、「雜擬」全般についての注釋でもあるが、「今情を明らかにする」のが一般的な創作詩であるのに對し、「今情を明らかにする」ために「古志に比す」という要素が大きく加わるのが擬作詩のスタイルの特徴であることを指摘する。擬作詩はおよそ「古志に比する」ものである。しかしそのような模倣行為を自體を目的とせず、「今情」にさらに「古志」が關係し、その關係の仕方ではじめてスタイルが成立する詩であることを、この注は示唆している。そこで以下には、この劉良の指摘に基づき、擬作詩に於ける「古志」と「今情」の關係を見ながら、章應物の擬作詩に具體的な考察を加え、「比古志、以明今情」というスタイルの詩がどのような意味を持つのか、明らかにしてゆこうと思う。

その際、特に「雜、謂非一類。」という劉良の指摘に注意しておきたい。擬作詩には様々な種類があり、それを『文選』の部立てでは「雜」という語で括ってあることを、この指摘は意味する。各擬作詩の詩題に冠せられた「擬」、「倣」、「依」、「學」、「代」などの語をにらんでの指摘であろうが、従来、擬作詩考察に於いてこの點、すなわち擬作詩に種類のあることが餘り考慮されていない。また残念なことに、劉良らもこれ以上、擬作詩の種類とその模倣様式にまで言及しようとしな。恐らく、『文選』の編纂當時すでに「擬」とか「代」とかが相互に交錯し、分類できなくなっていたか、逆にまだはっきりとは分化していないために、そのまま「雜」一字で一括して收められ、劉良ら後世の者の分類を拒んだためであろう。しかし、「雜擬」詩は明らかに眞似かたに更に下位分類がある。そしてその下位分類の考察こそが、擬作詩についての更なる理解をもたらすのではないかと思う。擬作詩の作者たちは、様々な種類に分けて擬作することで、單に眞似

るのでなく、「古志」と「今情」の關係のさせ方を工夫し、その工夫でしか描けないものを詠もうとしたのではないか。それが『文選』が擬作詩のスタイルの意義を認め、部立てを設けた理由ではないかと思う。「雜擬」の「雜」はそのような事情を率直に反映する。そして同じことは、章應物の「雜擬」についても言えると考え。

そこで更に、擬作詩の種類を型ごとに分け、その型についても付言しておく。擬作詩といえは『文選』所載の作者、陸機と梁の江淹（字は文通）が後世に名を知られる。陸機には「擬古詩」十二首があり、江淹には「雜體詩」三十首がある。そしてこの二篇は以下に述べるように種類を異にするそれぞれの主たる代表例でもあるが、擬作詩を類別し、積極的に擬作活動を行ったのは、むしろ劉宋の鮑照（字は明遠）である。鮑照は陸・江の試みに見られるものと同種の二篇を含む何種類かの擬作を試みている。『鮑氏集』（四部叢刊本）に、樂府詩も含め、

「代門有車馬客行」一首 「代陸平原君子有所思行」一首 「代陳思王白馬篇」一首 「代陳思王京洛篇」一首 「擬青青陵上栢」一首 「擬阮公夜中不能寐」一首 「學劉公幹體」五首 「學陶彭澤體」一首 「擬古」八首 「學古」一首 「紹古辭」七首

などが残存することがそれをものがたる。ここで「代」、「擬」、「學」などの類別を考慮しながら擬作活動している點は、擬作詩の型を考察する上でも注目に値する。

鮑照の擬作詩を概観すると、例えば「代」型は樂府題の詩の繼承（模倣）の仕方に似、中には結果的に「擬」型と同じ様式になっているものもあるが、原則として冒頭の詠い起しや主題についてのみ先行作品を模倣し、以下の展開・構成およびそのための措辭は擬作者の創意に委ねられる方式になっている。この「代」型については後述した

いので、ここで少しく觸れておくと、例えば右掲の一篇「代門有車馬客行」は陸機に先行作品があり、それは、

門有車馬客 門に車馬の客有り

駕言發故郷 駕して言に故郷を發す

と詠い起す。そして（九、十句目に）、

借問邦族間 邦族の間に借問すれば

側愴論存亡 側愴として存亡を論ず

と續き、このあとが故郷よりの「客」に故郷の移り變つた様を聞き、心を傷めるといふ展開になる。しかし、鮑照はそれを承け、冒頭は先行作品に眞似て、

門有車馬客 門に車馬の客有り

問君何郷土 問ふ君は何れの郷の土かと

と詠い起しながら、そのあとに（十三、十四句目）、

辭端竟未究 辭端竟に未だ究まらざるに

忽唱分途始 忽ち唱ふ分途の始まるを

と續け、故郷の移り變わりを嘆くよりも、今後に續く「客」としての苦惱を嘆ずるべく展開させてゆく。このように「代」型は、題に着想を借りつつも、構成や措辭の面で先行作品に捉われないのを特徴とする。

では「擬」型はどうか。後述するように、自己以前のある特定の一首を模倣對象とし、二句一聯ごとに言い換えるように眞似る。前述の陸機の「擬古詩」十二首はこの型である。

また、「學一體」型は、自己以前のある特定の二詩人の詩のスタイルの全體もしくは特徴的な一部分を模倣對象とし、その詩人の言いそふな事を、言いそふな口調で再現し、恰もその詩人が作つたかのように

に眞似る。前述の江淹の「雜體詩」三十首はこの型に入る。なお、この型についても後述する。

その外、鮑照の右掲の「擬古」八首のように、模倣對象が自己以前のある特定の何かに向けられているように見えて、それが詩題に明示されなかったり、或は對象全體も紛失してしまつたりで、實のところ模倣對象が限定しにくい擬作詩がある。陶淵明の「擬古」九首もこの型である。後世、李白や明の高啓が「擬古」という題で連作を作つてゐるが、それらはこの型の擬作詩を濫觴とする創作詩であると考へられる。

以上、擬作詩における「古志」と「今情」の關係は、「雜擬」の含義から、右に述べたような型を考慮しながら考察される必要のあることが分かると思う。

なお、擬作詩の制作意圖について、これまで、遊戯で作つたとする説、習作のためであるとする説、古人の文學や生涯に共感を表明したものであるとする説、および古人やその文學作品を評價するために作つたとする説などがある。この中で、習作説は作詩練習のために作つた作品が残つていて、その價値が認められ、一つのスタイルとして位置付けられるという可能性は殆ど無いであらうから、説として採りにくい。遊戯説も同様である。あり得るのは、共感説と評價・批評説である。ただし、共感するからこそ評價・批評もできるのであるとすれば、共感か評價かはどちらかに重きが置かれるだけの違いであり、實際は延長線上にあること、言うまでもない。

いま、前述の劉良の言葉に擬作詩の制作意圖という點から捉えた場合、自己表現説ということになる。共感説に近いが、共感は對象に景慕の念が働き、自分も同感だから、もしくはそうありたいと願うか

ら、擬作という形をとってあらわれる。自己表現は表現主體が自己に置かれ、願う状態、古人(對象)と同じかもしくは似た状態がすでに自己に訪れている場合にあらわれる。以下、劉良の言うようように「今情を明らかにする」ために、すなわち自己表現のために「古志」と關係付けるのか、それとも共感や評價のためなのか、以上の諸説を踏まえながら論をすすめる。

## 二 「擬」型のスタイル

現存の『章江州集』の「雜擬」の部立ての中には、既述した型規定に従って言えば、二種類の擬作詩が收められている。「擬」型と「效一體」型である。「雜體」五首は模倣對象が未詳で、或は擬作詩ではないかも知れない。これは暫く措くとして、「擬」型と「效一體」型については、鮑照の場合と同様に、やはり型ごとに明らかな差異が見られる。そして章應物は、この差異を意識的に捉えていたと思われる。

まず、「擬」型の「擬古詩」十二首から見ると、これは陸機の「擬古詩」十二首と同趣向で、かつ篇數や使用語彙などの點で先行作品である陸機の擬作詩を強く意識して作っている。「古詩十九首」中の十二首を模倣對象とし、一首一首、一篇の展開・構成は變えず、原則として二句一聯ごとの言い換えで作る。決して「古詩十九首」の總體的なスタイルを對象とした作品ではない。その中で例えば「其三」、

峩峩高山巔 峩峩たり高山の巔

浼浼青川流 浼浼たり青川の流れ

世人不自悟 世人 自らは悟らず

馳謝如驚蠹 馳謝すること驚蠹のごとし

百金非所重 百金は重んずる所に非ず

厚意良難得 厚意は良に得難し  
 旨酒親與朋 旨酒もて親と朋と  
 芳年樂京國 芳年 京國を樂しむ  
 京城繁華地 京城は繁華の地  
 軒蓋凌晨出 軒蓋 晨を凌いで出づ  
 垂楊十二衢 垂楊 十二の衢  
 隱映金張室 隱映す 金張の室  
 漢宮南北對 漢宮 南北に對し  
 飛觀齊白日 飛觀 白日に齊し  
 游泳屬芳時 游泳屬たま芳時なれば  
 平生自云畢 平生自ら云に畢く

は、「古詩十九首」の「其二」、

青青陵上栢 青青たり陵上の栢  
 磊磊澗中石 磊磊たり澗中の石  
 人生天地間 人の天地の間に生くるは  
 忽如遠行客 忽として遠行の客のごとし  
 斗酒相娛樂 斗酒もて相娛樂し  
 聊厚不爲薄 聊か厚しとし薄しと爲さず  
 驅車策駑馬 車を驅りて駑馬に策うち  
 遊戲宛與洛 宛と洛とに遊戲す  
 洛中何鬱鬱 洛中何ぞ鬱鬱たる  
 冠帶自相索 冠帶 自ら相索む  
 長衢羅夾巷 長衢 夾巷を羅ね  
 王侯多第宅 王侯 第宅多し  
 兩宮遙相望 兩宮 遙かに相望み

雙關百餘尺 雙關 百餘尺

極宴娛心意 宴を極めて心意を娛しましめば  
威威何所迫 威威何の迫る所ぞ

に擬する。陸機のはか飽照にも同じ作がある。章應物の作もそれらと同趣向で、例えば冒頭の二句を見ると、原詩の「青青陵上栢、磊磊澗中石」を「峩峩高山巔、浼浼青川流」というように、スタイルを形式上決定する疊字と、その疊字で修飾される概念——ここでは非凡なる存在——は變えず、原詩と同様にこの冒頭の句中に必ずそれを置く。そしてその上で内容を決定する意味のみを、語句の入れ換えによつて、いわば不即不離に、自分ならばこう言うというふうに言い直す。つまり、詩句の着想や構成・展開は原詩をほぼ模倣しながら、内容を擬作者側に引きつけるべく、二句一聯ごとに語句のレベルで手直しを加えることになる。従つて、擬作詩の方の語句と意味内容は、ひとまず擬作者章應物自身の言葉であると言つてよい。そしてその言葉は、自己の心情を吐露するために用意されたと見ることができるとすれば、原詩とそれを模倣して出来上がった擬作詩とは對峙する關係となり、相互に比較對照されることで類似點や相違點が論ぜられ、その過程を経て章應物の思いがしだいに、より鮮明化する。擬作詩に描かれた思いは原詩に似ているが、もはや同じではない。語句を言い換える際に原詩の「古志」に解釋、評價等の検討が加えられ、内容が改められ、章應物の「今情」となる。具體的に言えば、冒頭の二句は、原詩が「古志」として永遠不朽の存在を理想像とするのに對し、擬作詩の方は世俗を超越した存在を理想像と見、それを「今情」として提示する。

以下にこの點をもう少し詳細に見てゆくと、續く二句一聯すなわち三、四句目は、冒頭の二句と對置させて比喩を用いて描く形式のみ原

詩を模倣しながら、原詩の「人生天地間、忽如遠行客」に對し、擬作詩は「世人不自悟、馳謝如驚蠶」というように「世人」を捉え、冒頭の「高山巔」、「青川流」のような存在（人）とは「悟る」か否かの差のある存在を明らかにしようとする。原詩で「遠行客」に喩えられた人は、運命に從順である。しかし現今の「世人」は、もつとはかなく、瞬時に生きる。恰も「驚蠶」のようであるとの章應物流の解釋を加え、自ら破滅に向かうようにも取れる「人」を描く。

「擬」型にあらわれる原詩と擬作詩とのこのような相違點は、次聯すなわち五、六句目に於いて更に顯著である。原詩が威々たる心を慰めようとして都へ上り、「斗酒」の宴をつくし、それを「厚」しとするような、運命に甘んずる人物を「古志」として描くのに對し、擬作詩の方は「百金」と「厚意」による招聘を薄しとする若者を明確に捉え、都へ出て「旨酒」に耽り、あたら芳時をむだにする様を描き出す。そしてそのような若者に對する警鐘を、「今情」として鳴らす。清の陳沆が『詩比興箋』卷三で、

箋曰、刺得時之人、但知身樂也。夫百金之贖、尙不可忘。矧酒醴笙簧、蒙君祿養、報稱詎易。而榮華游宴、但耽歡娛、遂畢生平志事乎。（箋に曰はく、時を得し人の、但だ身の樂しみを知るのみを刺るなり。夫れ百金の贖すら、尙ほ忘るべからず。矧んや酒醴笙簧、君が祿の養ひを蒙るは、報稱詎ぞ易からん。而るを榮華游宴、但だ歡娛に耽り、生平の志事を遂げ畢ふるをや。）

と言ふのは、擬作詩の章應物側の「今情」をよく捉えている。更に十一、十二句目、原詩が「王侯」とのみ表現するところを、擬作詩では明確に權勢家であると解釋し直し、「金張」という語で都に跋扈する者の存在を指摘する。章應物は安史の亂後、朝臣として中央

政府に忠誠を盡くし、親しい者や友が藩鎮勢力に仕えてゆくことを餘り快く思わなかつたはずである。この擬作詩背景は未詳であるが、陳沆によれば韋應物は二十七、八歳の時に洛陽の丞の任に當たり、その際、魚朝恩に率いられ洛陽に駐屯した神策軍の横暴を見かねて諍いを起し、遂に上官に咎められた事がある、その時の體驗を背負っていると言ふ。この擬作詩には、國事を顧みず、權勢家の羽振りよきにひかれる若者への忠告の思ひが込められていると考えたい。

原詩の「古詩十九首」其三は、不遇の者が快樂を志向せざるを得ない様を「古志」すなわち一つの權威ある解答として提示し續けている。それに對し、擬作詩はその着想を借り、しかし、その原詩句に檢討を加え、次に自己の立場に即して解釋し、これまで見てきたように二句一聯ごとに自らの言葉に置き換えるという模倣行爲を通して、快樂を志向してしまふ「悟り」無き若い「世人」に警鐘を鳴らす。すなわち「今情」という自己の解答を提示する。この時點で擬作詩は結果的に原詩と對比され、より深く理解される。これが「擬」型のスタイルであると考えが、このことは陸機や鮑照の擬作詩にも言えることである。

### 三 「效一體」型のスタイル

次に韋應物に於ける「效一體」型について見てゆきたい。この型は六朝の「學一體」型と同型と思われ、模倣對象となつたその詩人特有のスタイルを再現すべく擬作するので、古人評價のように映り、一般に擬作者の「今情」を語る言葉には見えにくい。韋應物の擬作詩の中では、「與友生野飲效陶體」、「效陶彭澤」および「效何水部」二首がこの型に該當する。

まず「效陶彭澤」詩、

霜露悴百草 霜露 百草を悴ませ  
時菊獨妍華 時菊 獨り妍華たり  
物性有如此 物性に此のごとき有り  
寒暑其奈何 寒暑も其れ奈何せん  
掇英泛濁醪 英を掇りて濁醪に泛かべ  
日入會田家 日入りて田家に會す

盡醉茅簷下 醉ひを盡くす茅簷の下

一生豈在多 一生 豈に多きに在らんや

については、何よりもまず、宋代の詩話などに陶淵明にそっくりだと評價が見える。

陶韋異世、而同一機鍵。韋集有篇云、……(本詩の引用は省略)……。題曰、效陶彭澤。此眞陶語、何必效也。若近時趨陷中、雖極力摹擬、艱苦甚矣。(陶と韋は世を異にするも、機鍵を同一にす。韋集に篇有りて、「……」と云ふ。題して曰はく、「陶彭澤に效ふ」と。此れ眞に陶の語、何ぞ必ずしも效はんや。近時の趨陷中のごとき、力を極めて摹擬すと雖も、艱苦甚しいかな。)

〔宋、劉克莊「後村詩話」〕

古今詩人、多喜效淵明體者。如和陶詩非不多、但使淵明愧其雄麗耳。韋蘇州云、……(同右)……。非唯語似、而意亦太似。蓋意到而語隨之也。(古今の詩人に、淵明の體に效ふを喜む者多し。和陶詩のごとき、多からざるに非ざるも、但だ淵明をして其の雄麗なるを愧ぢしむるのみ。韋蘇州云ふ、「……」と。唯だに語の似たるのみに非ず、意も亦た太だ似たり。蓋し意到つて語これに隨ふならん。)

〔宋、周紫芝「竹坡詩話」〕

これらそっくりであるとの評價は、それが陶淵明のスタイルを捉えていることを指摘し、韋應物自身が自己の「今情」を語った言葉としては論じられていない。僅かに前者の「同一機鍵」と後者の「意到而語隨之也」という言い方に、韋の發想の仕方、考え方が陶に近似していたことの指摘が窺えるのみである。とすれば、韋の陶への共感までは分かるが、「古志」への共感の發露が目的と見られ、それによって語られるはずの「今情」が見えにくい。「今情」を明らかにするのが擬作詩の最終意圖であるとすれば、「效一體」型は擬型のように「古志」と對峙するほどに「今情」を前面に押し出すスタイルではないことになる。現に江淹の「雜體詩」三十首はその序文に、

…今作三十首詩、數其文體。雖不足品藻淵流、庶亦無乖商推云爾。  
(…今三十首の詩を作り、其の文體に數ふ。淵流を品藻するに足らずと雖も、庶はくは亦た商推に乖くこと無からんと爾か云ふ。)

と言い、「效一體」型を自己の心情吐露でなく、歴代の詩人の詩のスタイルを文學史的に並べ、批評するつもりで用いている。しかしそれでいて淹江は、別の一方で「效阮公詩」十五首を作り、諷刺という自己の心情吐露にも「效一體」型を用いる。前掲の鮑照の「學劉公幹體」や「學陶彭澤體」も後者である。

では、「效一體」型（「學一體」型）は「擬」型とは違うどのような方法で「今情」を明らかにするのか、それを「效陶彭澤」詩の作詩過程を考えながら見たい。

「效陶彭澤」詩は、陶淵明の「飲酒」二十首の「其七」、

秋菊有佳色 秋菊に佳色有り

裛露掇其英 露を裛んで其の英を掇る

汎此忘憂物 此の忘憂の物に汎かべ

韋應物の雜擬詩について

遠我遺世情 我が世を遺るるの情を遠くす

一觴雖獨進 一觴 獨り進むと雖も

杯盡壺自傾 杯盡き壺自ら傾く

日入群動息 日入りて群動息み

歸鳥趨林鳴 歸鳥 林に趨きて鳴く

嘯傲東軒下 嘯傲す 東軒の下

聊復得此生 聊復た此の生を得たり

を基調とする。しかしこれとは大幅に趣きを變え、むしろ「飲酒」二十首全篇のスタイルを捉え、その着想や語句を利用し、いわば寄せ集めるようにして作っている。決して「飲酒」二十首「其七」の替歌ではない。例えば「其七」は「一觴雖獨進」とあるように、作者は獨り飲む状況に置かれている。それに對し、擬作詩の方は陶淵明の別のスタイルである「會田家」という趣向を抽出し、田舎家に集まって飲む様を描く。そしてまた、「其七」の結句のように獨り「生」を見つめる趣向で結ばず、高尚な身を保持すれば會飲以外の楽しみは不要であるという、陶の別のスタイルを用いて主張を提示する。

そこでこの擬作詩がどの程度、またどのように韋應物自身の「今情」を明らかにするかが問題となる。まず使用語彙を中心に見ると、陶淵明と共有する語句がいくつか有ることに氣付く。「霜露」、「寒暑」、「裛英」、「田家」、「茅簷」、「一生」、「日入」など、いづれも韋應物に於いて使用頻度は高くないが、陶淵明と共有される語である。「濁醪」も陶詩では「濁酒」として見えるが、「醪」だけでなら陶淵明も愛用する。「效一體」型の性質上、似れば似るほど擬作者獨特の語彙は見當たらくなるが、以上の共有語彙の中で、更に韋應物も愛用する、もしくは常用する語が無いか探してゆくと、「霜露」、「寒暑」、「田家」が

擧げられる。章は「寒暑」の變化による「霜露」などで草花がしぼむことを他の詩でも好んで詠んでゐる。「田家」の樂しみにについても同様である。とすれば、陶にかなりの共感を示しながらも、それだけにとどまらず、擬作詩に利用する語句を抽出する際に、自己の心情を吐露できる語句を選び、それが章の愛用語、常用語の共有という形であらわれているとは考えられないか。例えば「會田家」というのは陶のスタイルであるのみならず、章もそれを願ひ、實際は似たような行爲をすでに實踐し、その際の「今情」を明らかにしようとして用いてゐることになる。

では、實際に「今情」の生ずる背景が有るのかどうか。續けて、語彙のみでなく作詩背景も併せて見てゆくと、詩題および詩中には作詩背景に直接言及した語はない。詩中に「田家」が詠まれているので、内容から察するに、長安郊外灑水のほとりの普福精舎に歸っていた時の作ではないかと推定される。とすれば、章應物が四十四、五歳の頃であろう。例えば「答暢校書當」詩(卷五、四十四歳の作)に、

偶然棄官去 偶然 官を棄てて去り  
投跡在田中 跡を投じて田中に在り  
日出照茅屋 日出てて茅屋を照らし  
園林養愚蒙 園林に愚蒙を養ふ  
雖云無一資 一資無しと云ふと雖も  
尊酌會不空 尊酌 會ず空しからず  
且忻百穀成 且く百穀の成るを忻び  
仰嘆造化功 仰いで造化の功を嘆す  
出入與民伍 出入は民と伍し  
作事靡不同 作事は同じからざる靡し

時伐南澗竹 時に南澗の竹を伐り  
夜還灑水東 夜は灑水の東に還る  
……

とあるのと状況が一致する。灑水のほとりに歸って「田家」を樂しんだことは「園林晏起、寄昭應韓明府・盧主簿」詩(卷三)にも見えるが、その頃の作に、やはりこの擬作詩と符合する「九日灑土作、寄崔主簿倬・二李端繫」(卷二、四十三歳の作)と題する詩がある。

望望臨灑淡 望望として灑の淡に臨む  
翠嶺明華秋 翠嶺 華秋明らか  
高天澄遙滓 高天 遙滓澄む

川寒流愈迅 川寒くして流れ愈いよ迅く  
霜交物初委 霜交はりて物初めて委ゆ

林葉索已空 林葉索きて已に空しく  
晨禽迎颺起 晨禽 颺を迎へて起つ

時菊乃盈泛 時菊 乃ち盈たし泛かべ  
濁醪自爲美 濁醪 自から美と爲る

良遊雖可娛 良遊は娛しむべしと雖も  
殷念在之子 殷念に念ふは之の子に在り

人生不自省 人生 自らは省みずんば  
營欲無終已 欲を營んで終はり已むこと無からん

孰能同一酌 孰か能く一酌を同にし  
陶然冥斯理 陶然として斯の理に冥すや

この詩の九、十句目に「時菊乃盈泛、濁醪自爲美」の句が見える。章應物の詩中に「時菊」と「濁醪」とを同時に取り上げた作品が外に無



いので、もしも同じような語句利用を或る一時期に好んだとすれば、「效陶彭澤」詩はこの詩と同じ頃の作と推定できる。この「九日澧上作……」詩も、羅聯添氏の「韋蘇州年譜」に據れば、鄂縣の令を辭めて澧水のはたりの善福精舎に隠退していた時の作である。前掲の暢當に寄せた詩と同様に、出仕している従弟の李端・李繫および妹婿の崔倬に寄せた詩で、三人のうち少なくとも崔は主簿として明らかに官遊の身である。その彼ら「親朋」に故郷に歸るよう促す。時に九月九日重陽の節句であり、菊と濁酒とがある。親しき者に欲を營むことを疑問視させようとした場合、端的に言えば、創作詩に據ると擬作詩に據るので、その効果はどのように違ふのか。確かに「九日澧上作……」詩のような創作詩で、最後の四句にあるように「人生不自省、營欲無終已。孰能同一酌、陶然冥斯理。」と直接説明してもよい。しかしこの場合、そのようにするよりは、陶淵明という菊見酒と無欲に關しては動かしがたい權威がすでに出した答を借りて説く方が、説得性がある。「古志」ここでは陶淵明の「飲酒」のスタイルが典據となつて權威をもたらし、受け手にも共感を呼び起こす。ここに「效一體」型の擬作詩は、模倣對象のスタイルを捉え、検討を加え、「古志」がそのまま「今情」でもあるように再構成し、提示してゆくものとなる。對象にそのまま自己の「今情」を比擬し、人生の問題に關してすでに出ている權威ある古來の解答を再提示し、再確認するようなスタイルを有していると言えよう。

「與友生野飲、效陶體」詩にもその結論はあてはまる。

攜酒花林下 酒を攜ちかふ花林の下

前有千載墳 前に千載の墳有り

於時不共酌 時に於いて共には酌しまずば

韋應物の雜擬詩について

奈此泉下人 此の泉下の人を奈なせん

始自甄芳物 始めは芳物を甄ひらぶよりし

行當念徂春 行くゆく當に徂ゆく春を念ふべし

聊舒遠世蹤 聊か世に遠とほざかるの蹤を舒ゆるべ

坐望還山雲 坐る山に還るの雲を望む

且遂一歡笑 且つ一たび歡笑するを遂げなば

焉知賤與貧 焉ぞ賤と貧とを知らんや

この擬作詩は陶淵明のスタイルの一般概念に合う詩ではないかも知れないが、陶詩を讀んでいる者ならすぐに「諸人共游周家墓柏下」詩、

今日天氣佳 今日 天氣佳し

清吹與鳴彈 清吹と鳴彈とに

感彼柏下人 彼の柏下の人に感じては

安得不爲歡 安んぞ歡を爲さざるを得んや

清歌散新聲 清歌 新聲を散じ

綠酒開芳顏 綠酒 芳顏を開く

未知明日事 未だ知らず明日の事

余襟良以彈 余が襟は良まことに以つて彈ひきん

を想起し、それが基調となつていことが分かるように作っている。詩題からは、長安かどこかの郊外に出かけた時の作かと察せられる。

「友生」と「野飲」した際、「貧賤」に關わる話が話題となった。見れば眼前に「墳」がある。そこで陶淵明の「諸人共游……」詩を想起し、

これを基調とし、しかし「擬」型のように「古志」と對峙する獨自の

新たな解答を提示するのではないので二句一聯ごとの言い換えには據

らず、むしろ陶の解答を確認するように、草葉の蔭に眠る古人を思え

ば「貧・賤」よりも「歡笑」の方がよいという、墳墓に因む權威ある

答を「效一體」型によって再提示したのではないか。従つて、「諸人共游……」詩一首の模倣ではなく、あくまでも陶のスタイルを再構築している。

この擬作詩と陶淵明との共通語彙としては、「千載」、「花林」、「歡笑」、「賤・貧」などが挙げられる。ただし、「賤・貧」は章應物の現存語彙中にこの例を除いて外に一例しかなく、この場限りの發言に近いかも知れない。更に「芳物」や「還山雲」という言い方は章の愛用語であり、「物」、「雲」という一語での使用を除き、陶の語彙中にそのままでは現存しない。「忘憂物」(「飲酒」二十首其七)や「杯中物」(「責子」詩)、および「寒雲沒西山」(「歲暮和張常侍」詩)や「雲無心以出岫」(「歸去來兮辭」)等の山と雲のとり合わせによる表現から抽出したに違いない。古人のスタイルという「古志」を捕捉しながら、自己が共感を覚え、その時の自己の状況に引きつけて自己表現にも結び付く部分を抽出し、「今情」を描こうとした章の意圖が、その共通語彙に窺える。

なお、章應物の「效一體」型には更に「效何水部」二首がある。阮籍や陶淵明を模倣對象とした擬作詩は多いが、梁の何遜は珍しい。章應物の擬作詩への取り組みを明らかにする一環として、以下に少し觸れておきたい。

章應物が陶淵明を景慕したことはよく知られている。また、章はどちらかと言えば唐代に於ける古體詩作家であり、官途に在る者の離合の様をテーマとした古詩を數多く残していることから、「古詩十九首」への傾倒も肯ける。その章應物が、むしろ近體詩の先驅として位置付けられる何遜にも注目していたことは、從來あまり知られていない。

しかし例えば章の「寄盧陟」詩(卷三)、

柳葉遍寒塘 柳葉 寒塘に遍く  
曉霜凝高閣 曉霜 高閣に凝る

累日此留連 累日 此に留連し  
別來成寂寞 別來 來つて寂寞を成す

のような五言四句詩を見ると、何遜の例えば「邊城思」詩、

柳黃未吐葉 柳は黄なるも未だ葉を吐かず  
水綠半含苔 水は綠なるも半ば苔を含む

春色邊城動 春色 邊城に動き  
客思故鄉來 客思 故郷より來たる

に類似していることに氣付く。征旅に於ける離別の情を、五言四句の短詩形を用いて自然風物の中に融かし込む何遜のスタイルが、章の嗜好に合っていたことは間違いない。

擬作詩「效何水部」二首も、何遜への追隨のあらわれであり、その權威に借りて、ただし征旅ではなく、闖怨を描こうとする。

其一

玉宇含清露 玉宇 清露を含み

香籠散輕煙 香籠 輕煙を散す

應當結沈抱 應當に沈抱を結び

難從茲夕眠 茲の夕べより眠り難かるべし

其二

夕漏起遙怨 夕漏 遙怨を起こし

蟲響亂秋陰 蟲響 秋陰を亂す

反覆相思字 反覆す 相思の字の

中有故人心 中に故人の心有るを

二首連作であると考えてよいと思うが、何遜の詩の現存数が少ないために、遜のスタイルのどのような部分を模倣したのかが捕捉しにくい。今、「效一體」型である點に逆に鑑み、その性質を利用して何遜のいかなるスタイルを捉え、特徴を抽出したかを推測すると、何遜の詩の中では五言四句の短詩形に效っており、前二句が敘景で後二句が抒情的であるような構成をとっていることから、何遜の例えば「闌怨」二首、

其一

竹葉響南窗 竹葉 南窓に響き  
月光照東壁 月光 東壁を照らす  
誰知夜獨覺 誰か知らん 夜獨り覺め  
枕前雙淚滴 枕前に雙淚の滴るを

其二

闌関行人斷 闌関 行人斷え  
房櫺月影斜 房櫺 月影斜めなり  
誰能北窗下 誰か能く北窓の下にて  
獨對後園花 獨り後園の花に對せんや

のような詩が、基調として想起される。詩題が示すように闌怨がテーマに取り上げられ、敘景部分は室内外の比較的身近かな調度や風物が素材に採られている。そして「闌怨」其二の「斷」字、「斜」字（擬作詩で言えば「亂」字）が示すように、景に情を象徴させる際、特に事態の悪化を暗示させる用字法を持つ。加えて、使用語彙は宮體詩風である。

闌怨をテーマとする五言四句の短詩形が、どれほど何遜のスタイルの一面を擔っているかは、實はずでに『玉臺新詠』が捕捉している。

章應物の雜擬詩について

『玉臺』の卷十に六朝時代の古絶句が集められ、何遜の五言四句詩もその中に五首收められていて、そのうち三首が右に述べたような特徴を備えている。『玉臺』の他の詩人の古絶句と比較してみると、齊の謝朓の「玉階怨」詩が些か同趣向かと思われる以外は、他に類似する作品が無い。『玉臺』もすでに闌怨をテーマとした古絶句を、何遜特有のスタイルとして認めていたと考えられる。

ここで、章應物の擬作詩と何遜のスタイルが共有する語彙を見ると、「清露」、「輕煙」、「故人」、「相思」および「蟲響」（何遜は「蟲聲」が挙げられる。この中で「相思」と「故人」は章應物の愛用語でもある。章は「故人」に對して「相思」の確認を促そうとするのを常套とする。そして親族や友人との離別に際し、「相思」を強調し、それに托して裏切りのない交友を訴える。章が何遜の古絶句に於ける闌怨のスタイルを、「相思」の者が離別を余儀なくされる時の、目に映る周囲のわびしい風物と相手を思う情とが一致した、しかも端的ながら餘情のある表現を持つと認めたとすれば、擬作詩に利用したことも首肯できる。何遜は杜甫をはじめ、唐代の詩人の注目を浴びている。章應物もその一人として、何遜が提示した闌怨をテーマとする古絶句體に權威性を認め、改めて利用し、自己の「今情」吐露を行ったことになる。

章應物は四十五歳の時に尙書比部員外郎の職に在り、その際、尙書省の南宮に宿直し、親しき者や友と離別するわびしさを「秋夜南宮、寄澄上弟及諸生」詩（卷二）に詠んだ。

暝色起烟閣 暝色 烟閣に起こり  
沉抱積離憂 沈抱 離憂を積む  
况兹風雨夜 况んや茲の風雨の夜

蕭條梧葉秋 蕭條たる梧葉の秋をや

空宇感涼至 空宇 涼の至るに感じ

頽顔驚歲周 頽顔 歳の周るに驚く

日夕遊闕下 日夕 闕下に遊び

山水憶同遊 山水 同に遊びしを憶ふ

二句目の「沈抱」という語は、韋應物の作品中では前掲の「效何水部」其一同この「秋夜南宮、……」詩にのみ見られ、内容に詠まれた状況もともに似ている。あるいは同じ頃の作かと察せられるが、弟らに變りない交友の確認を促すにも、何遜のスタイルを借りればより端的で、怨情を伴って効果的に傳わるのではないか。韋應物はどちらかと言えば古體詩人である。模倣對象とした何遜にも長篇の古體詩があり、また韻律の比較的整った五言八句詩もあつて、文學史的な評價を得ている。しかし何遜の長篇や五言八句詩はむしろ「贈答」、「應酬」、「送別」を詠んだ點ですぐれる。「聞怨」はやはり古絶句の體に於いて結實していると評價したからこそ、韋はそれに比擬し、空闈に在る婦人の立場を描くスタイルに借りて、自らの「今情」を効果的に述べたものと考へたい。

#### 四 「雜體」五首について

以上の外、『章江州集』の「雜擬」の部の中には、「雜體」五首という五言古詩が收められている。擬作詩であると判断されたからこそこの部立てに入っているはずであるが、この作の模倣對象は目下のところ分らない。詩の題から言えば江淹の「雜體詩」三十首と類似する。しかし、江淹の擬作詩は前述したように種類としては「效一體」型で、三十首それぞれが別個の對象を模倣し、各詩人のスタイルを明

確にするのに對し、この韋應物の「雜體」詩は逆にどれも同じスタイルで、同一の對象を模倣したように思われる。そこで逆にその點に着目し、模倣對象があると假定して、それを推測してみたい。どの一篇も何らかの特定の對象を模倣したからこそ互いに似ているのであるとすれば、各擬作詩に共通して見られる特徴は、模倣對象のスタイルの影響をうけているはずである。

例えば「其二」、

古宅集妖鳥 古宅 妖鳥集まり

群號枯樹枝 枯樹の枝に群號す

黄昏窺入室 黄昏 人の室を窺ひ

鬼物相與期 鬼物 相與に期す

居人不安寢 居人 安寢せず

搏擊思此時 搏擊 此の時を思ふ

豈無鷹與鷂 豈に鷹と鷂と無からんや

飽肉不肯飛 肉に飽きて飛ぶを肯せず

既乖逐鳥節 既に乖く鳥を逐ふの節

空養凌雲姿 空しく養ふ雲を凌ぐの姿

孤負肉食恩 肉食の恩に孤負くは

何異城上鷗 何ぞ城上の鷗に異ならんや

と、「其四」、

同聲自相應 同聲 自ら相應するに

體質不必齊 體質 必ずしも齊しからず

誰知買人鐔 誰か知らん 買人の鐔の

能使大樂諧 能く大樂をして諧はしむるを

鏗鏘發宮徵 鏗鏘として宮徵を發し

和樂變其哀 和樂は其の哀を變ず

人神既昭享 人神 既に昭らかに享け

鳳鳥亦下來 鳳鳥 亦た下り來たる

豈非至賤物 豈に至賤物の

一奏升天階 一たび奏づれば天階に升るに非ずや

物情苟有合 物情 苟しくも合する有らば

莫問玉與泥 玉と泥とを問ふ莫かれ

とを比較すると、一見相異なる二首のようではあっても、句數が共に十二句で、「其二」が或る人の「古宅」に養われながら肉食は満足して逐鳥の節を失った「鷹・鷗」に托し、恩にそむく、恐らくは藩鎮の節度使クラスの者を非難すべく作るのと同様、「其四」も、たとえ「至賤物」であっても、同聲相應すれば大樂にも諧う「賈人鐔」に托し、恐らく忠節の貧賤の士を稱えるべく作っている。そして、それぞれ主として「其二」は『左傳』文公十八年の條の、

（太史克）曰、見有禮於其君者、事之如孝子之養父母也。見無禮於其君者、誅之如鷹鷗之逐鳥雀也。（太史克）曰く、其の君に禮有るを見れば、これに事ふること孝子の父母を養ふがごときなり。其の君に禮無きを見れば、これを誅すること鷹鷗の鳥雀を逐ふがごときなり、と。

という故事を、「其四」は『晉書』荀勗傳の、  
初勗於路逢趙賈人牛鐔、識其聲。及掌樂、音韵未調。乃曰、得趙之牛鐔則諧矣。遂下郡國、悉送牛鐔、果得諧者。（初め勗は路に於いて趙の賈人の牛鐔に逢ひ、其の聲を識る。樂を掌るに及び、音韵未だ調はず。乃ち曰はく、「趙の牛鐔を得ば則ち諧はんと。遂に郡國に下し、悉く牛鐔を送らしむれば、果たして諧ふ者を得たり。）  
という故事をもとに作っていると考えられる。すなわち、「雜體」五

章應物の雜擬詩について

首は、或る故事をもとに、その故事に採り上げられた特徴のある物に托し、何かを諷刺するような作品を模倣對象とした擬作詩であると推定できる。

章應物の歌行には諷諭詩が多く、白居易への影響がすでに指摘されている。この「雜體」五首はまさにそれらの詩篇と同趣向で、その諷諭の文學活動の一環として作られている。例えば右掲の「其四」は鳥類に托して諷刺する點で、三首一連の歌行「烏引雛」、「鳶奪巢」、「燕啣泥」（卷九）と軌を一にする。「其二」、「其四」の外、「其一」の美人の「鏡」、「其三」の寒夜の女の「羅」、「其五」の和氏の「璞」とともに、これら一連の五首はその趣向の出處、すなわち模倣對象が、推定でなく具體的に明らかにされることで章の心情および彼の諷諭詩の理解も深まるが、それは今後の研究に俟たなければならない。

## 五 結 論

章應物の擬作詩について以上のように見てくると、擬作詩のスタイルは、確かに「古志」に比して、以つて今情を明らかにするものである。生涯および文學に於いて何らかの成就を遂げ得た古人の、その一解答である「古志」に、解釋、批評などの検討を加えながら模倣し、擬作者の「今情」を描く點が評價されると考えたい。ただし、その模倣の仕方には解答提示の仕方に應じて種々あり、それが擬作詩の型の違いとなっていること、そしてその型の違いについては、例えば「擬」型は、「古志」というすでに出された權威ある一解答に眞似ながら、それと同一様式で「今情」という自分自身に即して得た新たな解答を提示し、「古志」と對比關係を作ることによって、その「今情」を際立たせるスタイルであることが知られた。また「效一體」型は、「古

志」というすでに出された權威ある一解答を、それに比擬するという形で再提示し、その權威ある解答がそのまま「今情」となるような關係を作つて「今情」を描くスタイルであることも知られた。加えて、後者「效一體」型に著しいが、「古志」を検討する際に、「古志」への批評を内包していることも知られた。擬作詩のスタイルの特徴は以上のとおりであり、それが「古志」と「今情」とが關係し合つてはじめて成立する様式と言えるゆえんでもある。

この、特に種別を考慮した擬作詩の考察は、『文選』所載の各擬作詩をはじめとして、六朝のものに於いても試みる必要がある。しかし六朝の擬作詩の場合、傳記的資料や殘存作品が乏しい詩人が多く、その擬作詩がどのような背景で作られているのかが分りにくい。そのため、殘された擬作詩の語句や構成の面からしか考究できない場合が多い。その際、本稿で考察した擬作詩のスタイルの特徴規定を援用することが許されるならば、原作(者)と擬作詩の共有語彙などを手掛かりにしてそれを明らかにすることができる。今後の課題とし、追つて檢證してゆきたい。

なお、擬作詩への章應物の取り組みについては、まず擬作詩史的には、六朝の擬作詩の二大方式である「擬一體」と「學一體」型の擬作方式を、その特徴と効果をよく理解した上で典型として捉え、當時の擬作詩作家の中では傳統の様式を順守すべく繼承したと言える。「古詩十九首」への「擬一體」型の擬作は、特に陸機を繼承し、同趣向で作る。また「效一體」型は、詩史の上では江淹が有名だが、江淹の「雜體詩」三十首は既述したように自己の「今情」を明らかにしたものでなく、「古志」を「古志」のままで模倣した、「古志」評價(文學批評)である。それはむしろ江淹の「雜體詩」が「今情」を抑え、「古志」のみを顯

現させた、六朝時代のものの中では新しい手法に基づく特殊なものであったことをものがたるが、章應物はそれを意識してか、擬作の方式に採用していない。「與友生野飲……」詩に見られたように、やはり「今情」を明らかにしようとしており、江淹よりも前の、鮑照らの「學一體」型を繼承する。鮑照らの手法こそが本來のものであり、唐代に於ける古體詩作家章應物は、古典としての古詩の本來のスタイルを自己の文學の中で保持し、「古志」を「今情」發露の手段に用いている。いわば六朝以來の正統派の擬作詩作家に屬すと言つてもよいのではないかと考える。

次に、章應物自身の文學活動の中でその擬作詩を捉えておくと、「擬古詩」十二首では主として官途に於ける人生の離合をテーマとし、親しき者や友人同士が離別を餘儀なくされた安史の亂後の藩鎮割據の世相に對して、不満を表明する。これは章應物の古體詩の多くに見られる特徴であり、「擬古詩」十二首は、それら離別を問題にした章の古體詩の、しかも古來からの問題と解答を踏まえた、その縮圖的作品と位置付けることができる。

同様に考えれば、「效陶(體)」詩は、陶淵明を殊に景慕した章應物の、田園をテーマとする詩群の、古人の意まで體した縮圖的作品と言つてもよいのではないかと考える。

何遜の古絶句に對する章の模倣も、從來注目されてはいないが、五言四句の短詩形に於いて「閨怨」の情を巧みに景物に一致させる何遜の詩の特徴を認めている。そしてそれを再提示することで自己の思いも効果的に表出できるとした意圖が窺えるところから、古絶句體の詩の可能性を示唆した作品と言える。

「雜體」五首では諷諭を扱う。これも章應物の諷諭詩の一結實であ

ると考えれば、その縮圖的作品であると位置付けられる。

以上を總じて、唐の詩人韋應物の擬作詩は、その「雜擬」という部立てそのものが彼自身の文學活動の、しかも先人の文學を共鳴させた文學活動の縮圖となっており、韋應物という詩人を考える際に看過できない作品群であるという評價を與えることができようである。

注 (1) 「四部叢刊」本『韋江州集』を底本とし、以下、作品引用の際の出處は卷數のみを示す。

(2) 「古志」という語の用例を、これ以前に見出せない。沈約の「宋書謝靈運傳論」等に「情志」という語が見え、思想感情の意で用いられている。この意味の「情志」を「志」と「情」とに分け、「古」と「今」を冠したと解しておく。「今情」は「南齊書文學傳論」に、「全借古語、用申今情。」と見える。

(3) 『文選』の五臣注には、「良曰、擬、比也。」のほか、「濟曰、倣、象也。」、「濟曰、依、亦擬也。」と見える。

(4) 『南史』齊武陵昭王暉傳の「暉性剛穎備出、與諸王共作短句詩、學謝靈運體、以呈高帝。帝報曰、見汝二十字、諸兒作中最高爲優。但康樂放蕩、作體不辨有首尾。」などの記載に見えるエピソードは、遊戯の域を越え、文學批評になつてゐる。

(5) 『唐詩品彙』は「雜體」五首のうち「沈沈匣中鏡」詩と「同聲自相應」詩の二首を収録し、「雜體一首」としながら、「擬古」ではなく、「雜興」の部に入れてゐる。

(6) 韋應物の「擬古詩」十二首は「古詩十九首」に擬するが、詩の配列順序は必ずしも一致していない。

(7) 「四部叢刊」本『鮑氏集』卷四に「擬青陵上栢」と題して、「消消たり江に亂るる泉、綿綿たり、海に横たはる煙。浮生、昭世に放り、空事、華年を歎ず。……興童『秉椒』を唱ひ、樞女『采蓮』を歌ふ。……

韋應物の雜擬詩について

生を娛しましむるは信に謬りに非ず、安んぞ多賢を求むるを用いんや。」と見える。

(8) 「百金」は『史記』に「李牧、趙之良將也。匈奴入、牧選百金之士五萬、擊之。」とあり、『漢書音義』に「服虔曰、良士直百金。言重也。」とある。また「厚意」は『詩』鹿鳴序に、「鹿鳴燕群臣嘉賓也、既飲食之、又實幣帛筐篚、以將其厚意、然後忠臣嘉賓得盡其心矣。」とあるのによる。

(9) 「金張」は『漢書』張湯傳贊に「張氏之子孫相繼、自宣・元已來、爲侍中・中常侍者凡十餘人、功臣後、唯有金氏張氏、親近貴寵、比於外戚。」とあるのによる。

(10) 韋應物の、中央政府への忠誠は、深澤一幸氏「韋應物の歌行」(中國文學報24)に「豪士」の意識として論じられている。

(11) 藩鎮勢力に仕える者のあつたことは、張國剛氏『唐代藩鎮研究』(湖南教育出版社)に詳しい。韋應物の知人では李益が幽州に仕えている。

(12) 羅聯添氏「韋應物年譜」(臺灣學海出版社印行『唐代詩文六家年譜』所收)により、陳沈の説を補足する。

(13) 「擬」字は廣義、狹義兩用されており、廣くは擬作詩一般を指して言う。「擬」型は、鮑照の「擬青陵上栢」詩のような、或る特定の一首を對象とした種類を言うものとし、謝靈運の「擬魏太子鄴中集」八首の各首などは、むしろ例外の部類に入れてもよいと考える。

(14) 陸機の擬作詩については、高橋和巳作品集『中國文學論集』9(河出書房新社)所收「陸機の傳記とその文學」に詳しい。

(15) 韋應物の「效陶彭澤」詩は短かめの五言八句詩であるが、その點は批判されていない。同じ唐代の詩人曹鄴の「田家・效陶」詩が七言絶句であるのに比べれば、許容されよう。

(16) 『滄浪詩話』考證篇には、逆に陶淵明の作として残っている「問來使」なる詩について、「體製氣象」が陶に似ず、贋作であるとの鑑定が

見える。陶の詩の體が話題になり易かったことをものがたる。

(17) 何遜の詩風および情と景の關係は、劉暢氏『何遜集注』(天津古籍出版社)の前言で觸れている。

(18) 注(17)に同じく、劉暢氏の説による。

(19) 注(10)の深澤氏も言及し、「……應物の詩が『雜體』という題を持つかぎり、その詩と作った彼自身とは直結せず、まねる對象としての第三者がわりこんできて、詩そのものはその第三者に引きよせられてしまふことになる。第三者があるのかないのかさえわからないにしても。」と  
言う。「第三者」の存在およびその「わりこみ」は考察の餘地がある。

(20) 鮑照の「學劉公幹體」五首が、やはり劉楨という一詩人(の「贈從弟」三首)のスタイルに學まなんでおり、五首が同じスタイルを備えるのに似ている。ただし鮑照は「雜體」と題さない。韋應物の「雜體」五首がなぜ「雜」なのかも、目下未詳である。

(21) 注(10)の深澤氏の論文に詳しい。

(22) 韋應物の詩語は、トーマス・P・L・ニールソン氏『韋應物詩注引得』

(美國中文資料中心 研究資料叢書14)に負うところが大きい。

(23) 注(15)に觸れた曹鄴の「效陶」詩などが、逆に非傳統的な擬作詩の例として挙げられる。